

国内初※

千葉工場で「酸素燃焼方式」の大型ガラス溶融窯が本格稼働

2026年3月31日、当社は千葉工場（千葉県柏市）において、酸素燃焼方式を導入したガラスびん用の大型ガラス溶融窯の本格稼働を開始しました。

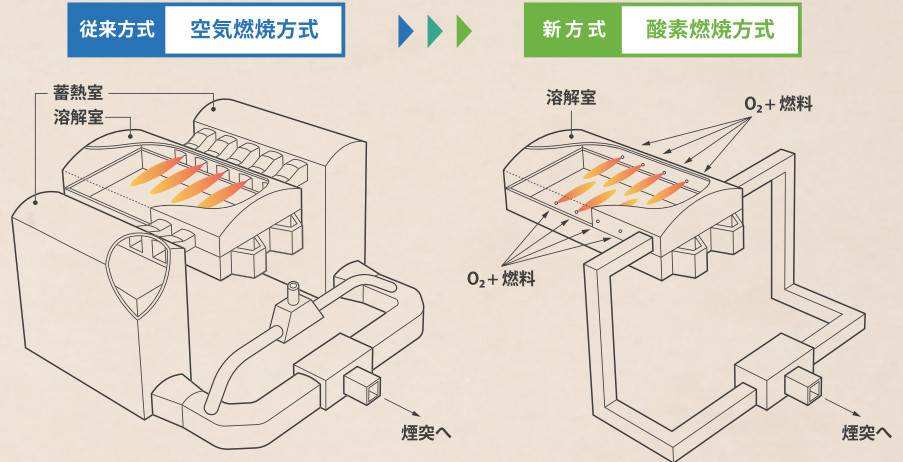
※生産能力が200t/日を超えるガラスびん用溶融窯における酸素燃焼方式の導入は国内初。
（2026年3月時点、東洋ガラス調べ）

取り組みの背景

ガラスびん産業は、溶融窯での高温燃焼に多大なエネルギーを必要とするため、GHGの排出削減が業界全体の大きな課題となっています。

東洋ガラスは事業活動と地球環境保全の両立を目指し、省エネルギー化やリサイクルの推進に取り組んできました。

今回のプロジェクトは、省エネルギーと脱炭素社会の実現に向けた最重要施策の1つとして2024年5月に始動。約2年間の準備・工事期間を経て、今回の本格稼働に至りました。



酸素燃焼方式の導入メリット



温室効果ガス（GHG）の大幅削減

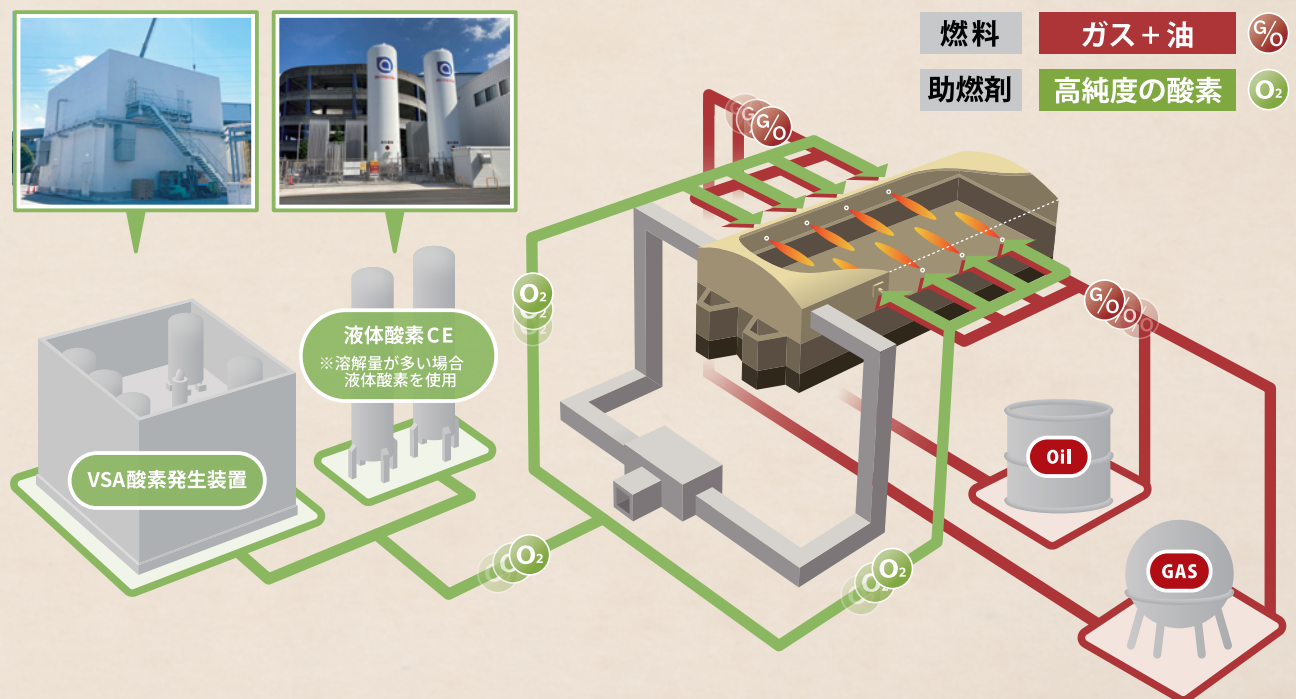
- 窒素を介さない燃焼によりガラスへの伝熱効率が向上。
- 従来の生産量を維持しながら、溶融窯1基あたりのGHG排出量を従来比約2割削減。



廃棄物の発生抑制

- 大量の蓄熱用レンガを用いる「蓄熱室」が不要になり、廃棄物の発生を抑制。

千葉工場酸素供給設備 見取り図



今後の展望

今回の本格稼働を皮切りに、東洋ガラスは今後も最新技術の導入を推進し、多角的なアプローチで環境負荷低減に努めていく方針です。本取り組みがガラスびん産業全体の脱炭素化を牽引するモデルケースとなることが期待されており、当社は持続可能な社会の実現に向けて、顧客やサプライヤー、地域社会とともに環境に優しいガラスびんの提供と製造プロセスの革新を進めていきます。